

二つのアメリカ

―バルバラとファン・トマス・デ・サラスへ―

カルロス・フエンテス

石井 登 訳

彼らが見た事柄を両王へ報告するためには

千の舌を用いてもそれを語るのに十分ではなく

それを記述するために同じだけの手を用いても同様であろう

彼は魅了されているように見えた……

クリストバル・コロン、『航海誌』

バルトロメ・デ・ラス・カサスによる

正確な記述による記録

ジェノバの船乗りによる日記の断片

今日、魅力的な浜辺に上陸した。蒸し暑くなり、早々と夜が明けたが、水の煌めきは空のそれよりも輝いていた。これほど透き通った海はなく、その緑は、パロス港

からの長かった航海中に壊血病で死んでいった私の船員たちがとても飲みたがった、レモンジュースのようだ。まるで水面がそれこそガラスのようなので、底まで見える。底は白砂で、色とりどりの魚たちが漂っている。

帆は嵐で引き裂かれてしまった。八月三日、私たちは

サルテスの砂州から出航し、最後に陸地を見たのは九月六日のカナリア諸島のラゴメラ港を出た時だった。三艘のカラベラ船で今も残っているのは、反乱と死からなんとか救い出した小舟のみだ。乗組員の中で私だけが生き残っている。

私の目だけがこの浜辺を見ているし、私の足だけがそれを踏みしめている。習慣が私に命じることをする。跪いて神に感謝を捧げる。神は重要なことに忙殺されているにちがいないが、私に注目してもらうためだ。古い帆柱で十字を作り、犠牲と祝福を祈る。この地に踏み入ることなど決してあるはずもないカトリック両王の名の下に、私は土地を要求する。私は裸で何も持たずこの浜辺にたどり着いた。しかし、何を手にしようというのか、彼らか、私か？ この地は何なのだ？ 何ということだ、私はどこに在るのだ？

以前、かのジェノバで母が言っていたことがある。風に当てるために数えきれないシーツを千す母を手伝い、大帆船から世界の果てへの想いに駆り立てられていた、幼い頃からだ。「坊や、夢を見るのはやめなさい。どうして見たり触ったりできるものに満足しないのかしら。どうして有りもしないことをわたしに話すの」

母の言う通りだった。私は見ているものの喜びに満足すべきだった。白い砂浜。ジェノバやリスボンの喧噪からあまりに遠く離れた、無愛想な静けさ。柔らかなそよ風とアンダルシアの四月のような天気。ティレニア海の港という港に充満する悪臭がまったく空気の新鮮さ。ここでは空を曇らせるのはオウムの群れだけだ。また浜辺の砂にはヨーロッパのあらゆる街の汚物も、ゴミも、血だらけのぼろ布も、蠅や鼠も見当たらず、無垢の白い波打ち際、まさに真砂のごとき無数の真珠、産卵中のウミガメ、そして、海のそばには鬱蒼とした椰子の林が浜辺の裏手まで続き、山へ向かう斜面には、マツヤカシ、ヤマモモからなる木立があり、それを目にするのは嬉しい。また、この世界の頂は雪を冠った高山で、この世に聳え立ち、あえて言えば、荒れ狂うノアの大洪水から救えるほどだ。疑いの余地はない。私は樂園へやって来たのだ。

これが見つけたかったものなのだろうか？ 私の目的が中国と日本へ辿り着くことというのほもう分かっている。ともかく私が呟いたのは、結局、あらかじめ想像がつくものは最後にはただ発見されるだけであるということだ。したがって、アジアへ到達することは単に私の意

志の、あるいは、もしあなた方がそれを好むなら、官能のメタファーだった。乳飲み子の頃から、大地が丸いことは肌で感じていた。私の母は二つの立派な乳房を持っていたが、私がいつも喜んで吸っていたのでまもなく吸い尽くしてしまった。彼女は食いしん坊な子供を育てるよりもシーツを洗ったり干したりすることの方が好きだと言った。そのため、私にはイタリア人の乳母たちが次々とやってきたが、彼女たちの乳房は負けず劣らずよく乳が出て、丸くて心地よく、その乳房はえも言われぬ先端で終わっていて、そこから、まさに私は世界と同じビジョンを形成することになったのだ。乳房から乳房、乳から乳、私の眼差しと唇はそのビジョンとその球体の味わいで溢れていた。

第一の帰結——生涯、私は世界を、そこがより高くなっているヘタがあるところを除いて、すべてがとても丸い一つの梨のようなもの、またはとても丸いボールのよう、あるいは女の乳房のよう、この乳首の部分が高く、最も天に近いようなものと考えた。

第二の帰結——それは、狂っていると卵は立たないなどと、もじも誰かが言ってきたなら、私は議論に勝つために、卵の端を押しつぶして、このようにそれをしっかり立たせていた。だが実際、私の頭では、乳を吸い尽くして、乳母が悲鳴をあげるまで、乳首を噛んでいよう

と考えていた。喜びから？ 苦しみから？
私がそれを知ることとは決してないだろう。

あの幼少時代が、今ここで早く認めねばならない三つ目の帰結を含んでいる。私たちジェノバ人はまず真剣には受け止められない。イタリアでは多様な段階の誠実さがある。フィレンツェ人は私たちジェノバ人を信用に値しないと考えている。一方、彼らは自分たちを控え目で計算高く、商売向きの素晴らしい頭脳を持つ民族だと思っている。しかしフェラーラの市民たちはフィレンツェ人を下品で、忌むしく、欲深く、目的を達成するためにあらゆる方法を正当化する企みと欺瞞に満ちた人々だと思っている。フェラーラ人は古くて変わらぬ優雅なメダルのように、安定して上品であることを好む。あまりに優れている（あるいはそう感じている）ので、高貴なイメージを裏切らないように何もせず、見る間に絶望や自殺へと行き着く。

したがって、もしフェラーラ人がフィレンツェ人を軽蔑すると、フィレンツェ人はそれをジェノバ人へ、私たちに残された方策は、騒々しくて垢で汚れて軽薄なナポリ人を見下すしかなく、またナポリ人は恐ろしく、人殺しで、不誠実なシシリア人にゴミを投げつけるより他に

術がない。

まもなく海に流すつもりはこの日記の読者は、私の劇的な決心を理解するために、先立つこともまた理解して欲しい。私の土地の私の時代の人間は多くの侮辱を押し付けてきたのと同様にそれに耐えなければならなかった。ジェノバ人として、私は自分の航海の知識と惑星円周乳房状説を携えて訪れたヨーロッパのすべての宮廷で、妄想家やペテン師のように扱われた。大口たたきで、うぬぼれの強い、事実よりも空想の男。そんな風に扱われた。パリでもローマでも、ロンドンでもハンザの港でも同じ。初めての謁見の後、——何処にでもいる噂好きからそのことを知った——フェルナンドとイサベルは私に関してそのように述べたそうだ。だからリスボンへ移った。ポルトガルの首都にはすべての冒険家、夢想家、商人、高利貸し、錬金術師や世の中の発明家が集まっていたのだ。あそこでは私は大勢の中の一人でいられたし、丸い世界を抱きしめ、乳房であるこの世界を驚嘆みにし、乳の一滴も出なくなるまでその乳首をしゃぶるために、間違ひなく欠けていたことを学ぶのに、そのすべてがあった。高くついた修行時代だった。

昨日、この新しい土地で最初の人々がやって来た。た

った一人で、星々に関する卓越した知識だけに導かれた。この数日間の小舟の旅に疲れ果て、私は砂浜で寝ていた。こんな夢を見た。まさに悪夢だった。大海原で嵐に襲われた恐ろしい場面で、水夫たちは絶望し、壊血病と死、謀反でとうとう、水の入った革袋三つ、酒の瓶二本、種の詰まった大袋と、がらくた、色のついた縁なしの帽子と、隠し間仕切りには紙と羽根ペンとインクといった妙なもので一杯のトランクを積んだ小舟に私を置き去りにして、スペインへ引き返してしまおうというものだ。心底忌々しいピンソン兄弟が実に陰険な決定を下したのだ。嫌な時に私を置き去りにしてくれたものだ。昨日、蛇でできた筏に乗って彼らの歯のない死体が通り過ぎる夢を見た。

目覚めると、口のまわりは夢の奥底から与えられたもうひとつの皮膚のように砂だらけだった。すぐさま空を見上げるとカラスやカモは飛び去り、たちまちカナリア色の顔に取り囲まれた。その連中は歌うような甲高い声で小鳥のように話す。私の腋を掴んで起き上がらせようと持ち上げると、目の前に彼らの全身が裸の姿が現れる。彼らは私に飲み物を与え、テントのようなものへと案内して、そこで知らない料理を振る舞い、そして休ませてくれた。

それからの日々、この人々に世話され守られて、力を

取り戻し、そして彼らに驚いた。戦争の不幸もなく、裸で、大変おとなしく、武器も持たない男たちと女たちであった。その土地は実に肥沃な水辺の大きな集落だった。彼らは規則正しく満ち足りた生活を営んでいた。綿の網のように揺れるベッドで寝ていた。人々は手に湯気の立つ燃えさしを手に村々をうろついていたが、私にとっての乳房のように、それを明らかに喜んでしゃぶっていた。一本の木材で九五パルモ（¹）の長さの大変見事な筏を製造していて、それで一五〇人まで乗せて航海し、まもなく私も知ることになったたたくさんの島々や大陸と交易していた。

そう、私はパラダイスへと迫り着いていて、そのジレンマはただ一つだった。この発見をヨーロッパの名家のパトロンに伝えるか否かということ。黙っているか私の手柄を報告するか。

驚きのあまり世界が崇拜し、ヨーロッパの君主たちがその偉業の前に屈するのに、ふさわしい手紙を書いた。何の嘘もつかなかったって？ 私の大陸や世界の商魂逞しさと並外れた貪欲さなんてわかっていたから、そのために黄金とスパイスと乳香と大黄に満ちた大地を書いたのだ。結局は、イギリス、オランダ、スペインあるいは

ポルトガルなどの探索会社が、ヨーロッパの食卓に塩や胡椒を置くことで儲けていた。したがって金の小片が小麦の穀粒のように採れると書いた。まるで万物の乳房のごとく、大洪水を免れて、聳え立ち煌めくソロモンの黄金の山脈がここにはある、と。

しかしながら、金銭欲を包み隠して舌に合わせるような架空の衣である、我が同時代人にとっての作り話の必要性は知らないわけではなかった。黄金、然り、だが深い鉱山で食人族や凶暴な肉食獣によって守られている。真珠も然り、三つの乳房を持つ三人のセイレーンの歌によって明かされる。透き通った海、だが二つの、さらには折りたためるペニスを持ったサメが波を切って行き来する。豊かな島々、しかし一年にたった一度だけ男たちの訪問を受け入れては身籠り、九ヶ月ごとに男の子どもたちはその父親らへ送り返し、女の子どもたちだけを手に残すアマゾネスらによって守られている。彼女たちは侵入者に対して無慈悲である。彼らを去勢してしまう。自分たちに対しても無慈悲である。その矢を放ち易くするために片方の乳房を切り落とす。

神話的な奇行と同様に、これらの未開人たちの威厳についての著しい評価によって、我が人生の最も痛々しい

経験を隠していることを、今、私は認めねばならない。二十年前にアフリカ行きのポルトガル遠征隊に参加したが、それは黒人たちを捕まえた後に、彼らを密売するための忌まわしい仕事だということがわかった。厚かましさに勝るものを男たちは知らなかった。象牙海岸の黒人の王は、謀反や逃亡で自分の臣民らを咎めて、彼らを探しては捕まえていた。キリスト教に改宗させ、その魂を救うために、王自身がキリスト教の聖職者に人々を引き渡していた。その度に、聖職者たちは、ヨーロッパへ連れて行って、彼らを働かせる目的のため、ポルトガルの奴隷商人の優れた管理に彼らを委ねていた。

ギニア湾の港々から出発する彼らを見たが、そこではポルトガル人の商人が、宗教によって救済するためとはいえ、奴隷となった人々と交換する、黒人の王たちのための商品を積んだ船でやってきていた。船の絹織物、綿布、王座、食器類、鏡、フランス島の風景画、祈禱書や渡瓶は空になり、妻から引き離された男たちで一杯になっていた。前者はある目的地へ、後者は他へ送られ、子どもたちも隔てられて、全員が窮屈なガレー船の中に投げ込まれた。動く隙もなく、あるものがあるものの上に糞尿をせねばならず、ただ近くにあるものに触れるしかなく、堪え難いほどに自らを取り囲んでいた者たちに、理解されることのない彼ら自身の言葉で話しかけるしか

なかった。これよりも辱められ、蔑まれ、残酷さの全くの気まぐれに縛られた人種があっただろうか？ これは一体？

ギニア湾では船が出発するのを見たが、今、私の新世界ではこんなことが決して起こらないようにと自身に誓った。

すなわち、これこそ古人が呼ぶ黄金時代のようにであり、彼らとその島を呼ぶときに言った、アンティリアの我が新しい友人たちにそれを語って聞かせたが、彼らは理解することなく私の言うことを聞いていた、つまり彼ら自我自身とその時代で言い表していたのだ。初めは黄金時代で、このとき人間は、墮落していない理性と善を常に探求することによって、身を処していた。罰によって強制されたり、怖れに駆り立てられたりすることなく、その言葉は素朴でありその魂は誠実だった。抑圧する者がいかなかったので法も裁判官も裁判所も必要なかった。壁もラップも剣も作られなかったし、結果、誰もこの言葉を知らなかった。君の物と僕の物。

鉄の時代が到来することは避けられなかったのだろうか？ 私にそれを延期することができただろうか？ どれだけの時間？

私は黄金時代へとやって来ていた。善き野蛮人を抱きしめた。ヨーロッパ人にその存在を明かそうとしていたのだろうか？ 奴隷制度や死から、下心もなく、穏やかな、裸のこれらの人々を解放しようとしていたのだろうか？

様々な動機から、そして多様な戦略をもって、黙り込み彼らの間に留まることに決めた。彼はお人好しと一悶着起こすにちがいないなどと読者は思わないで欲しい。つまりジェノバ人は大風呂敷かもしれないが、馬鹿ではない。

自分のトランクを開くと何個かの帽子とビーズ細工があった。私をもてなす主人たちに喜んでそれらを差し出し、彼らはこれらのガラクタで大喜びした。しかし私は自分に問いかけてみた。もし私の目的が北京にある大カインの宮廷やジパングの途方もない帝国に辿り着くことだとしたら、サンタマリアの港の市場で手に入れたこれらのガラクタで誰を驚かせようとしていたのだろうか？ 中国人や日本人は私をあざ笑ったことだろう。その昔から、あの乳房の、無意識の領域では真実が分かっていた。カタイへ着くことを望まなかったのだからカタイには辿り着かなかったのだろう、私はパラダイスへ辿り着きたかった、それにエデンには裸体と無意識以上の富はない。多分、これが私の本当の夢だった。それを実現した。今

はそれを守らなければならなかった。

ポルトガルの最も厳格な航海法が私を守っていて、それは秘密の法律であった。リスボンとプンタ・デ・サグレスから出航した航海者は、セバステイアン派(2)で夢想家な君主の命で、何が何でも秘密主義の政策を強制していた。彼らの発見したルートや場所を漏らそうとしたポルトガル人の船長たち(取るに足らない船員はいうまでもなく)は世界の果てまで追いかけて、見つければたら(そうになったら、躊躇うことなく)八つ裂きにされていった。カーボ・ベルデからブエナ・エスペランサまでとモザンビークからマカオまでといった、ルシタニアのルートに沿って裏切り者の頭から足の先までが見つけられていた。彼らは冷酷であった。もし彼らのルートでもぐりの船舶を見つけたら、ポルトガル人は直ちにそれらを沈めてしまうようにと命じられていた。

この絶対的な沈黙へと私は逃げ込む。手袋を裏返すようにそのことを逆手に取って、自分のためにそれを利用する。絶対的沈黙。永遠の秘密。どうして話好きで大風呂敷なジェノバの船乗りになったのだろうか？ 実際はどこから来たのだろうか？ なぜ、もしイタリア人だったらスペイン語だけで書いていたのだろうか？ にもかかわらず、なぜ、彼自身が(つまり、私自身が)書いた(書いた)らすぐにイタリア人だったと信じるのだろうか？

私は外国人だって？　だが、あの時代に、外国人であることは何を意味していたのだろうか？　それはナポリ人にとってのジェノバ人、あるいはカタルーニャ人にとってのアンダルシア人だったのだ。

まるで自分の運命が見て取れるように、私は綿密に混乱をまき散らした。ポンテベドラでは、ガリシア人を狂気へと駆り立てるために偽りの記録を残した。彼らは頑固な現実主義者である反面、空想を愛している。その代わりに、決して夢を見ないエストレマドゥーラ人には、本当はピアセンサであるにもかかわらず、私がブラセンシアで育ったと信じさせた。マジョルカとカタルーニャには友好と敵意を向けた。精霊のそれである私の苗字はそこらの沿岸に溢れている。未だに傑出した人物を持たないコルシカでは、バスティアを通るときに二人の酔っぱらった聖職者に話した嘘について、私に抗議することになるだろう。

にもかかわらず、誰も騙さなかった。明確に書き残した唯一のものは次の通りだ。「とても小さな頃から船乗りになって、今日に到るまでそれを続けてきた……。もう足掛け四〇年以上ものあいだ、私はこの仕事に関わっている。幸運のすべてが今日の航海によるもの、すべてが私の歩んできたことなのだ。学識豊かな人々と交際し会話をしてきた。聖職者と世俗の人々、ラテン教会とギ

リシア教会、ユダヤ人とモーロ人、そして他の宗派の多くの人々と」

私の祖国は海である。

セイレーンとアマゾネス、黄金と真珠、サメとリバイアサンについての真っ赤な嘘、作り話のページを入れた瓶を海へと流した。しかしまた、河川と海岸、山々や森林、耕作に適した土地、果実や魚、人々の高貴な美しさ、パラダイスの存在については真実を物語った。

されど、ここで聞いた名前と私が作った性質でそれをすべて覆い隠した。名前はアンティリアだった。その性質は断続性であった。アンティリアの島は視界に現れては消えていた。ある日、太陽がそれを明らかにしたが、次には霧がそれを隠した。ある日は浮かび上がり、次には沈んでいた。具体的な幻、儂い現実、眠りと不眠のあいだで、結局、このアンティリアの大地は、子どもの頃からの私のように、むしろそれを思い描くことができる者のためだけに現れるのだった。

私は作り話の瓶を海に流した。誰もこれを見つけないとは決していないだろうし、もしそれを見つけても、その中に狂人の戯言を読むことになるのは間違いない。だが私は、我が不変の住処となる場所へと優しい友人たちに

よって導かれて、今だけは私の書き留める真実を独り言
 ちた。

ここがその場所だった。七つの川が流れ込む淡水の湾
 は、その清流の勢いで海の塩分を抑えている。川は永遠
 の降誕、更新、永久に入れ替わる浄化と活力であり、ア
 ンティリアの河川は、絶え間なく、心地よいせせらぎと
 ともに湾へと注ぐ。それは、地中海の街の横丁の乱痴気
 騒ぎや、売り子たち、子供たち、守衛、悪党ども、外科
 医、肉屋、小物売り、刃物職人、鋳造師、パン焼き職人、
 皮なめし職人、床屋、油売りの罵声、そして夜と怖れの、
 あるいは切迫した死の沈黙まで一様に排していた。

ここでは掘建て小屋とアマカ（彼らが麻糸のベッドに
 与えていた名前であった）が充てがわれた。優しく面倒
 見の良い女。散策ためのいかだと私に付き添うのに二人
 の若い漕ぎ手。豊富な食事、海からは鯛と川からは鱈、
 鹿と七面鳥、パイヤとグアナバナ。大袋から取り出し
 た種はオレンジだった。パラダイスの湾の谷や丘へ私た
 ちは一緒に種を蒔いた。アンダルシアのものよりもよい、
 光沢のある葉と香り立つ花々を持つ木がアンティリアで
 は育った。太陽も羨むほど、太陽によく似たよいオレン
 ジをこれまで一度も見ることがなかった。ついに私は吸
 うことができ、食べられて、尽きることはない、完璧な
 乳房の庭を手に入れたのだ。もう自分の人生を征服して

いた。回復した青春の永遠の持ち主であった。そうある
 ことに恥ずかしさも懐かしさもない子供だった。死ぬま
 でオレンジを啜ることができた。

そう、パラダイス。とりわけ異なる現実、ヨーロッパ
 人には説明のつかない歴史を説明することの恐るべき必
 要性から解放されて、そこに留まっていた。彼らが作る
 か学んだものとは異なった歴史があることをヨーロッパ
 はどのように理解していくのだろうか？ 現在は過去の
 相続人であるだけでなく未来の起源でもあることをヨ
 ーロッパ人はどのように受け入れていくのだろうか？ な
 んと恐ろしい責任なのだろう。誰もそれに耐えられない
 のだろう。誰よりも私が。

私という人物についてのすべての嘘を終わりにして次
 のことを認めることで、個人的にかなりの問題を抱える
 ことになるだろう。私はカタルーニャ人でもガリシア人
 でもマジョルカ人でもジェノバ人でもない。イベリアの
 追放ユダヤ人で、お決まりの迫害の後に家族はスペイン
 から逃げた。また一つ、大勢の一つの、始まりも終わり
 もない……。

偶然へ捧げられたこれらのメモを読む者は、それを読
 む時に、私の沈黙の、自製の、アンティリアへの帰属の

理由をきくと理解することだろう。私は、自分の個人的な好意や、受け入れてくれた人々への共感さえ、親愛の情によるものであることにしかなかった。私をある神の伝説の主役に変えていたうわさは気にも止めなかった。私、白くて髭を生やした神？ 私、人々に与えた大地を彼らが大切に扱ってきたかどうかを確かめるために、時間通りに帰ってきた？ 乳母たちの乳房を思い出し、永遠に再生し、いつも私の傍らにあって、ほとんど支えでもあるオレンジに大口で喰らいついた。

白く塗られた高い見晴し台のバルコニーから、大地の広がり、川と湾と海の合流点を眺める。七つの川は、あるものはゆったりと、他のものは激しく（一つの滝も含めて）、珊瑚礁によって海の怒りから守られて大海原へと順次緩やかに開ける湾を満たすべく流れる。貿易風で涼しい私の白い家は、オレンジの果樹園を見下ろし、たくさん月の桂樹で守られている。私の背後では、山々が、松や糸杉、榎やヤマモモの名を囁く。イヌワシは白い頂上に羽根を休め、蝶は、半分は金、半分は雨のもう一つの滝のように流れ落ちてくる。世界のあらゆる鳥たちがこの汚れない空に集まってくる。鶴、金剛インコや黒い眼鏡のフクロウから、私とその名前でよりも、その外観で見分けるものまで。それは黒い耳の魔法使いのような鳥、巨大なパラソルのように広がる鳥、枢機卿の

緋衣を纏ったもの、銀色ののどを持つもの、キツツキやリスのような鳥、赤い嘴の鳥や短い嘴のハト、あるものはトランペットのように鳴き、あるものは時計のような音をたてる、喰い尽くすことでその豊かさから栄養を得るキリハシやアライクイ鳥。カラカラ鳥の絶えることない鳴き声はそのすべてを支配する。決して飛んだことがないが、大地を這いずり回りながら、浪費を貪り、そのことで命を取り戻す我が陸生の鷹。

我が地上のパラダイスの目に見える生命の先に、彼らを支えるものがあるならば、それは取るに足らない目に見えない生命である。動物の生命の豊かさは明白で、カラスや山猫、バク、ヒョウはジャングルや山の中で自分の道にはっきりと印を付け、静けさや夜の中の道筋である生々しい臭いの案内なしでは、道に迷ってしまうことだろう。けたたましいカラカラ鷹が明らかにそれに導かれるように、ホエザルとアルマジロ、ジャガーとイグアナ、そのすべては水と空気を清める数百万もの目に見えない生物によって導かれる。ジャングルの香りは、濃厚さの目に見えない光のような数百万の隠れた小さな生き物たちから発散されるのだ。

彼らは蠢き知るために夜を待つ。我々は夜明けを喜ぶ。毎晩戸口へやってくる褐色のオオカミの、フラシ天のような大きい耳を私は見る。そこに血液を集中させて熱を

逃がす。熱帯における命のシンボルであり、もし長生きしたり、自然な流れを尊重したいなら、そこには豊かに生きるためのすべてが整えられている。誰もが誰かに嫌悪を抱くのは反対に、我々は敵意を示したり、自然を傷つけながら支配しようとすることはほとんどない。私が新世界の男たちと女たちは大地を大切に扱うことを知っている。絶えず彼らにそのことを語り、たとえ私が神ではなくとも、そのことで彼らは私を尊び守っている。

ヨーロッパに置き去りにした人生とこの人生を比較し、私は震え上がった。時折炎によって救い出されるが、続いて煤によって窒息させられる、塵の中に葬り去られた街々。トルコ帽を冠した、腑の見える街々、そのドブ川には膿みや尿、月経の血や嘔吐、無駄な精液や猫の死骸が流れる。灯りもない、狭い、窮屈な街々、そこでは誰もが亡霊のように彷徨い、夢魔のように微睡む。乞食、強盗、狂人、独り言をする群衆、こそこそした鼠、群れへと戻る逃げた犬、偏頭痛、熱病、目眩、震え、股の間や腋の下の血の固い吹き出物、皮膚の黒い縦筋。四〇日の断食でヨーロッパでは四千万人の死者が出た。街々に人影が絶えた。略奪者たちは我々の財産を取り上げ始め、獣どもが我々の寝床に移り住んだ。我々の目は破れた。我々が民は井戸に毒を入れたことで非難された。我々はスペインから追い出された。

今、私はパラダイスで暮らす。

どれだけの時間？ 時折、私の家族や散らばった人々について考える。この新世界で家族、それに妻、子孫を持つ？ あり得る。パラダイスに暮らすことは結論なく暮らすことである。感情がフィルターを通して水のように私の皮膚と記憶を通り抜ける。思い出よりもたくさん、ある感覚が残る。まるでこの土地へ到達したことと、オレンジの木々のある白い家で平和に滞在することと、あいだで過ぎてきた時間のようである。

自分の果樹園を耕す。オレンジの中で、より直接的な官能の喜びが一つになる——私を見る、触る、皮を剥く、噛む、飲み込む——が、最も古い感覚もまた同様である。母、乳房たち、乳房、球体、世界、卵……。

されど、もし私の個人史が共鳴することを望むなら、乳房はオレンジから、昔からずっと熱心に我が身に携えている思い出の二つの対象へと赴かなければならない。一つはトレドのユダヤ人街にある両親の先祖代々の家の鍵である。迫害によってスペインを捨てたが、我々はカステイリヤ語も家の鍵も決して失わなかった。それは手から手へと受け継がれてきた。金属製にもかかわらず、決して冷たい鍵であったことはなかった。ユダヤ人たちの掌が、指が、指先が、爪がそれを大切に扱ってきた。

もう一つは祈りの鐘である。スペインの追放ユダヤ人

は皆、それを手に旅し、我々の戸棚の扉にそれを打ち付ける。私はアンティリアと同じことをする。新世界の友人たちは、シャツとズボン、サンダルといった、すべすべして柔らかい、白くて通気性のリネンの衣類を身につけることを教えてくれたから、古い短長の胴衣や長靴下を入れておく、記念のような洋服箆笥を急いで作った。そこに私は移民ユダヤ人のプレガリアを打ち付けたが、その祈りはこのようなものだ。母なるスペイン、あなたは自分のユダヤの息子たちに残酷であった。我々を迫害し追い出してきた。我々は自らの家、自らの土地を置き去りにしたが、我々の思い出は違うのだ。あなたの残酷な仕打ちにもかかわらず、我々はあなたを愛する、スペイン、あなたの元へと帰ることを切望する。ある日あなたが息子たちを受け入れ、彼らに両腕を広げ、許しを請い、あなたの土地への我々の忠誠を認めることだろう。我々は自分の家へと帰ることだろう。これが鍵である。これが祈りである。

その祈りを暗唱し、まるで願いが叶ったかのように、カラカラ鳥のように切羽詰まって甲高い、我が到着の記憶が蘇る。

私はバルコニーで腰掛けながら、朝一番に、私にでき

る最善のことをしている。それはじっと見つめることである。これまでにはないほど速い風が吹く。ナイチンゲールの鳴き声が足りないだけだ。追放ユダヤ人のスペインへの帰還の祈りを唱えてきた。何故かはわからないが、そのことに備えることに慣れてきっていて、決して私を悩ませることのない、あることについて考える。アンティリアは周期的に現れては消える土地である。それらの変化の法則を見つけてなかったし、それを知りたくもない。出現と消失の暦を知ることが、自分たちが死ぬ日付を前もって知ることのようで怖い。

自然と人生の現実の時間の命ずるままにしていたい。じっと見つめること、楽しむこと。しかし今朝は思いがけなく、イグサの茎を銜えた白い鳥が飛び去り、そのことから船乗りは喜ばしいことが起こると思う。なぜなら海では寝ない鳥だからである。それは陸地が近いことを示している。貿易風が吹き、海は川のように満ちている。カモ、ワタリガラスとカツオドリが南東へと逃げ去って行く。その切迫ぶりが私を不安にさせる。空高く、木の枝のように二股に分かれて鳥たちが飛んで行くのを見て、不意に私は飛び起きる。獲物のカツオドリが食べたものを吐き出させ、それを美味しく平らげる鳥だ。海鳥であるが、海では休まず、陸地から二〇レグア(2)は離れない。

私は過去のある出来事を考えていることに気づく。これはここへとやって来たときにはもうわかっていたことである。この幻影を追い払って、今日起こることについて考えようと努めてみる。しかしながら、この二つの出来事については区別がつかない。別の鳥が空に姿を現す。初めにほとんど小さな点が近づいてきて、それから明るい星になり、あまりに明るいので、太陽と見紛うばかりに目を眩ませる。鳥は湾へと下りる。その腹から筏のような二本のとても大きな足が出て、ものすごい唸り声とともに、カラカラ鳥のいきり立った叫びを制して、水の上に身を落ち着ける。水飛沫を上げて、湾の水を波立たせる。

すべてが静まる。その鳥には窓と扉がある。空の家だ。ノアの箱船と神話のペガサスの混合物。扉が開き、ニコニコと、太陽の輝きと金属を曇らせる輝く歯の、我が先達マルコ・ポーロが記述するような黄色い男が現れる、さらさらと照り返す眼鏡を掛け、手には黒い靴とワニ革の靴、おかしなスタイルの出で立ちである。

彼はお辞儀をして、空飛ぶ船から外れた、唸る小舟に乗って、私の方へとやってくる。

何も驚かない。あらかじめ私は この私のことをおし

ャペリで無知な水夫の類いだと思いたがる人々の誤解を解いた。神は私に知の精神を与え、船乗りとして開花させた。十分なほどの占星術や幾何学や算術、そして街々、河川や山々、島々や港々、そのすべてが神そのものの空間である球体を描くために、魂の中の天賦の才能を与えた。

これらの特性の主、私は、望んでいた日本へ着いたのではなくて、新しい土地にやってきたのではないかと（決して認めていないのだが）心から苦しんできた。科学的な男としてはそれを認めなければならなかったが、政治的な男としては隠さなければならなかった。そのように務めたが、私の物語で宿命的なこの朝、手には黒い皮のアタッシュケースとワニの靴で、私の元へ彼を連れてきた鳥のように輝く、ライトグレーのスーツ姿の小さな男がこちらに微笑みかけ自己紹介したとき、恐るべき真実を知った。

私は日本へ着いたのではなかった。日本が私の元へやって来たのだ。

私の顔にも声にも敬意を払わず、あらゆる種類の機械、恐らく羅針盤、水時計、コンパス、あるいは恐らく貞操帯などを操作していた四人の男性、二人の女性、六人を従えて、その客はノムラ氏であると簡単に自己紹介した。彼らの議論はダイレクトで明瞭で簡潔だった。

「私どもはこれらの土地での貴方の管理を感嘆とともに注意深く調べてきました。貴方のおかげで世界は河川、森林、植物相と動物相、汚れない浜辺と汚染されてない魚の無垢の特別な保護区を手に入れます。おめでとうございませう、クリストバルサン。私どもは長い間の貴方の隠棲に敬意を表してきました。今日、貴方がパラダイスを残りの人類と共有する瞬間がやってきました」

「どうしてわかったのだろう……？」私は口籠った。

「貴方は日本へは到達しなかったのですが、手稿の詰め込まれた貴方の瓶が届きました。私どもはこの瞬間を待ち望んできました。貴方のパラダイス、ご存知ですか？ 実に頻繁に現れては消えていた。昔の探検隊は決して戻ってこなかった。不変であるにもかかわらず不確実に動き、ついには、現れては消えることで人を惑わすような、私どもが新世界と呼ぶにふさわしい、その存在を特定するための技術が完成するまで長い時間を待たなければなりませんでした。私が話しているのはリーダー、リーダー、超音波……。高解像度のスクリーンについて話しています」

「あなたがたは一体何を望んでいるのだろうか……？」膨らむ混乱の中で、私はかろうじて言うことができた。

「コロンボサン、貴方の協力です。貴方はチームの素晴らしいメンバーとなることでしょう。私どもはただチ

ームで働いています。貴方が協力してすべてがうまくいくことです。ワ！ ワ！ ワ！ 賛成、クリストバル様」と言って、ちょっとだけ跳ねて、それから爪先立ちで止まった。

彼は微笑み、ため息をついた。

「遅れてはしまいましたが、我々は出会いました」

私はスペイン両王とのサンタフェの協約の時よりもたぐさんの紙にサインした。ノムラと日本人の弁護士部隊（湾はヨットや帆船、水上飛行機で一杯になった）は私にアンティリアの浜辺をメイジ商会に引き渡させたが、彼らは同時にその開発をアマテラス社に下請けさせ、この会社は順番にホテル群の建設をミナモト会へ譲り渡して、この会社はリネン類の調達をムラサキ・デザイン、タオル類に関してはミシマ・グループ、化粧品類と石鹼類はイチカワ・グループと契約していた。レストランはカワバタ・エージェンシー、ディスコはタニザキ・エージェンシーによって運営されることになっていて、料理は、輸入品を扱うエンドー・グループと地場産品を扱うオベ・グループが合弁したアクタガワ社によって用意されることになり、地場産品は島ではミゾグチ会によって処理され、クロサワ運輸によってホテルへと運ばれ

ることになっていて、そのすべてが現地の従業員によってもたらされる（どうして貴方は彼らをアポリジニ、原住民、インディヘナ、アンティリーヤ人と呼ばせようとするのですか？ 私どもは感受性を傷つけることは好みません）彼らは観光のおかげで繁栄するでしょう、コロンブスサン、そして生活の水準が天国へと駆け上がることを理解することでしょう。我々に必要なのは、ホテルのお客様のための旅行ガイドと、運転手と、バス路線とレンタカーの支店、プレジャーボートにバラ色のジープ、そのための高速道路と、観光客のために、彼らの求めるもののすべてです。彼らに我が家にいるかのように感じさせるためのモーター、ピザ屋、ガソリンスタンドや有名ブランド。つまり旅行客は——貴方は海洋の提督とパラダイスINCの取締役会の会長として知らなければならぬ——ということが第一です——その家庭生活がやめられないことに気づくために旅行します。

苦いお茶を差し出した。「私どもはそれで容易に識別できる商標というものに権利を与えてきました。セビーリヤの通商院(4)と同じように、欲の張った財産を決して認めたりしないCEE(5)の独占禁止法との係争を避けるために、貴方の良心を楽にするためにということも付け加えておきます、——どうぞ、こちらです——個々の契約書のひとつひとつに貴方はサインしなければなら

ない」

茫然自失で、探検に出発したときのスペインのすべての王族の証書よりもたくさんの、フライドチキンと炭酸水の販売店、ガソリンスタンド、モーター、ピザ屋、アイスクリーム屋、写真雑誌、タバコ屋、タイヤ、スーパーマーケット、カメラ、自動車、ヨット、楽器やその他諸々についての様々な契約書にサインした。

我が新世界は蜘蛛の巣で被われており、私はその中心に捕われた、無力の、哀れな虫であると感じた。なぜなら、すでに述べたように、パラダイスに暮らすことは結論なく暮らすことなのだ。

「心配は要りません。チームに協力して下さい。会社に協力して下さい。誰がこのすべての主となるのかとは問わないで下さい。誰でもありません。私どもを信用して下さい。貴方の土地の人々はこの上なく快適に暮らしていくことでしょう。そして世界は、究極の、至高の、この星でたった一つだけのリゾート地、新世界、貴方とその息子たちが汚染、犯罪、都市の退廃を逃れて、公害のない大地を思う存分に享受できる魅惑の砂浜を貴方に感謝することでしょう。パラダイスINC」

要約したい。景色は変わってしまう。酸性の煙が昼も

夜も喉まで染み込む。私の保護者で、実に精力的なノムラ氏に微笑みかける時まで目から涙が出る、彼は、私を脅かしたり、労働組合や抗議行動を組織する人々に対して、私への奉仕としてサムライの警備隊を設置していた。すべてが私に対して向けられつつある、つまり、私がこの匿名の新しい帝国の目に見える唯一の支配者なのだ。少し前から、彼らは仲間だ。

「覚えておいて下さい、クリストバル様。私どもは二一世紀のための企業です。迅速さ、敏捷、これらが私どものノルマです。私どもは役所と官僚制度を避け、設備や道具を持たない、それをみんな借りるだけ、それだけです。そして新聞記者たちがパラダイスINCの本当の主について貴方に質問してきた時には、貴方はこう言うだけです。誰でもない。全員です、と。チームの精神、クリストバルサン、会社への忠誠、毎朝のヨガ、各晩のバリウム……」

ノムラは、閉ざされた土地が遠くにあっても、パラダイスINCはあらゆる国々に開かれていることを私に気付かせた。これは確かだ。我々の水の清らかさと空気の爽やかさ、我々の砂浜の純白と森の処女性を喜ぶ欲深い旅行者たちの団体を乗せてやって来る飛行機に、ある日残してきた古い国旗を、私は郷愁とともに見た。ポルトガル航空、エール・フランス航空、イベリア航空、ルフ

トハンザ航空、アリタリア航空、ブリティッシュ・エアウェイズ……。それらのマークの色は、我が冒険のための援助を求めて奔走した宮廷を甘く切なく思い出させた。今や、それらはブレイアデスの競技場でのペガサスたちの間の馬上試合の鎧のようであった。

幾千も幾千もの旅行者たちがやってきて、一〇月二日に私は、裸のインディオの男たち（そして女たち）に囲まれて、一五世紀の私の古い祭服を誇示しながら、ニサのカーニバルから持ってきた山車で練り歩かせられた。今や、言うまでもないが、服は全部バナナ・リパブリック製である。誰も私を邪魔しない。私は有名人なのだ。

だが私の鼻は、むなしく、夜の目に見えない街道の香を嗅いでみようとする。幾千もの隠れた生き物たちが、バクや鹿、山猫やジャガーを案内するために空気に匂いを付けていたのだが。もうそれらは聞こえず、それらは臭わない。ただあの耳の尖った褐色のオオカミだけが私の傍についてくる。熱帯の暑さも心が弾む白い四阿によってどこかへ行ってしまう。二人でオレンジの果樹園の方を見つめる。オオカミには理解してもらいたい。オレンジとこの動物、そして私が生き残りであることを……。彼らは誰も私の傍へ寄せ付けない。私に怖れることを義務づけていた。時々、ピンク色のシャツでベッドを作り、萎れる前に蘭に水をやる元気のないムラート女や黒

人女と目を合わせる。しかし彼女らの眼差しは冷淡なだけではなく、恨みっぽい、そして何か良くない。すねた女。

ある夜インディオの若いメイドがいなくなる。怒って、まさに抗議するところだ。私はある変化に気付く。不寛容で、のんびりで、年老いてしまっている……。ハンモックを保護する薄絹を取ると（最初に驚いたその喜ばしい習慣を守ってきた）、そこに横たわる、若く、ほっそりした蜜の色の女を見つける。鉛筆のように硬直して、ただハンモックの揺れだけが彼女を柔らかにする。ドイツ、ダルムシュタット生まれのウーテ・ピンカーネイルであると言葉と身振りで熱心に自己紹介する、そして私に、メイドとしてここまで入り込むことができた、つまり私は嚴重に保護されていて、真実を知らないと言う。両腕を広げて、それで私を包み、耳元で、力なく、神経質そうに語る、「地球上には六〇億の人々がいるのですが、東洋と西洋の大都市は今にも滅びるところです、窒息、ゴミ、大災害がそれらの都市をすっかり覆っています、彼らはあなたを騙してきたのよ、あなたのパラダイスは、灯りもなく、狭くて困われた、物乞いの、天井もない私たちの都市の最後の排水口です、そこでは強盗や狂人たち、独り言をする群衆、ここそした鼠、獐猛な群れを為す犬、偏頭痛、熱病、目眩が蔓延っているの、多くの

者のための、汚水に沈んで崩壊した街と、ごく少数の者のための、高地にある手の届かない都市、そしてあなたの島は唯一最後の排水溝、あなたの目的を達成した、あなたは自分の国民を奴隷にして壊滅させてきたのよ……」

これしか言うことはできなかった。サムライたちが入ってきて、叫び声を上げ、飛び跳ね、サブマシンガンを振り回し、私を荒々しく引き摺り出した。ペランダは火と轟音で塞がれ、白い光がすべてを洗い、広い範囲で同じ瞬間に、火炎放射器がオレンジの果実園に火を放ち、よく懐いていたオオカミの心臓を銃剣が貫いた、そしてウーテ・ピンカーネイルの乳房は、啞然として物欲しげな私の視線の前に露になった。その後、娘の血がハンモックの編み目の間から滴った……。

パラダイスに暮らすことは結論なく暮らすことである。今では死んでいくことやスペインへ帰るために許可を必要とすることは分かっている。ノムラ氏は初めて私に不平を漏らした。「貴方はグループのメンバーとして行動しなかった。クリストバルサン。永久に進化の法則から外れた貴方のパラダイスを維持しようとしているなんて思っていたのですか？ パラダイスというものを維持し

ていることで、貴方はただそれを侵略し利用するという全世界的な欲望を増大させていたのだと考えてみて下さい。もうお分かりでしょう。ジャグジーやシャンパン、ポルシェやデイスコの無いパラダイスはありません。フライドポテトやハンバーガー、炭酸水やナポリ風ピザのないパラダイスはありません。万人のために喜びを。キリストの運び手、聖霊の鳩といった、貴方の名前の象徴性を信じ続けることはできません。それではお引き取り下さい、飛びたて小鳩、そして貴方のメッセージを持って行くのです。サヨナラ、キリスト。パラダイス、バンザイ！ ワ！ ワ！ ワ！ 賛成！ 出る釘は素早く打たれることになる」

イベリア航空のフライトで、私は、尊い遺物、五百年の失踪の後にスペインへと戻るクリストバル・コロントして扱われる。時間と空間についてのすべての概念を失っていた。今は、空からそれを取り戻す。おお、帰路では、我が初めの旅の足跡をこうして上から眺めながら、どんなふうに味わおうか。それは、樗とヤマモモの山々、すべてが耕された、最も肥沃な大地、七つの川が流れ込む湾の水を切って進む筏、その川の一つには乳の柔らかい色をした滝が。私は海とセイレーン、リバイアサンと太陽へその矢を放っているアマゾネスを見る。そして、焼き尽くされた私の果実園の上を飛びながら、汚物が打

ち寄せる砂浜、血だらけのぼろ布、ハエや鼠ども、悪臭の空と汚染された水などをすぐさま思い浮かべる。ユダヤ人とアラブ人を追い出すか根絶やしにする前に、また再びこのすべてを彼らのせいにするだろうか？

カモやワタリガラスが飛んでいるのを眺めて、我々の乗る機体が気まぐれな海の上の緩やかな貿易風に後押しされているのを感じる。こちらではクリスタルのように穏やかで、あちらではサルガッソーに足止めされた、最初の旅の最悪の時期のように、時には激しい。星々の近くを飛んでいるが、それにもかかわらず、夕暮れのただ一つの星座だけを見る。ウーテ・ピンカーネイルの素晴らしい胸がその形を成す、もう私が触れることのない乳房……。

私はフレシネ(6)を振る舞われ、読むようにと雑誌『オラ』(?)を配られる。ニュースの内容が理解できない。たいしたことはない。私はスペインへの帰路にある。家に帰るのだ。それぞれの手の中に我が起源の証拠を携えて。片手で、オレンジの種を握りしめる。この果実が島の容赦のない開発から生き残って欲しい。もう片方の手には、トレドにある先祖代々の家の冷たい鍵。死ぬためにその家へ帰ろう。石とたわんだ屋根の家、我が先祖たちが去って以来開かれることのなかった、きしむ木製の扉。虐殺と災害、怖れと死、嘘と憎悪……それらに追

い出されたユダヤ人たち。

声を出さず、スカプラリオのように胸に打ち付けてきた祈りを唱える。我々の家族と家を放棄しないために、スペインのユダヤ人が永い時の間ずっと守っていた言葉でそれを唱える。「愛するスペイン、あなたへ、我々はあなたを母と呼び、我々の生けるすべての間、あなたの甘い言葉を放棄しない。あなたがその胸から継母のように我々を追い出したのに、最も神聖な土地のようにあなたを愛することを止めない、我らの父たちが埋められ、親族と幾千もの愛する者たちの灰を残した土地。あなたのために我々は子としての愛を抱き続ける、栄光の国、それ故にあなたに我々の輝かしい敬意を送る」

祈りを繰り返す、鍵を握りしめる、種に軽く触れ、洋上の広大な夢に身を任せる、そこでは時が流れるように循環し、昨日と今日の征服者たち、再征服と逆征服、包圍されたパラダイス、絶頂と退廃、到着と出発、出現と消滅、記憶と欲望のユートピア……、すべてを結びつけ関係付ける。繰り返されるこの人々の移動は民族、移民、逃走、希望、昨日と今日の痛みを伴う活動なのだ。

ヨーロッパへ戻って私は何に出会うのだろうか？
私は再び家の扉を開くだろう。

再びオレンジの種を蒔くだろう。

ロンドン、一九九二年一月一日

訳注

- (1) 約二〇メートル。一バルモは約二一センチメートル。
 - (2) ホルトガル王、セバステイアン（一五五七—一五七八）か？ 熱心なキリスト教徒でモロッコへ出兵。不死説で知られる。
 - あるいは、聖セバステイアンのセバステイアヌスからかも知れない。
 - (3) 長さの単位。スペインの基準であれば一レダは約五五七二メートル。約一一・五キロメートル。
 - (4) カサ・デ・コントラタシオン。一五〇三年、セビリアに設立。
 - (5) Comunidad de Economía Europea 欧州経済共同体。
 - (6) スペインのワイン。Fraxenet はスペインのワインメーカー。
 - (7) *Holal* スペインの雑誌。
- LAS DOS AMERICAS from "El naranjo" by Carlos Fuentes
- Copyright © 1993 Carlos Fuentes
- Japanese language serialization rights arranged with The Carlos Fuentes Literary Trust
- c/o Brandt & Hochman Literary Agents, Inc. New York through Tuttle-Mori Agency, Inc. Tokyo